フォーカス 奥出雲創生の現在地
ラストイヤー 奥出雲おろち号

全国的にもファンが多く、長年にわたって親しまれてきた奥出雲おろち号の運行も、今年を最後に終了です。ラストイヤーとなる今年の運行開始を前に、奥出雲おろち号はどのようにして生まれ、現在まで愛されてきたのかを紹介します。

中国地方初・運行距離日本一のトロッコ列車の誕生

「奥出雲おろち号」が中国地方初のトロッコ列車として運行を開始したのは、1998年の4月25日。木次駅からJR西日本で唯一の三段式スイッチバックやJR西日本で最も標高の高い三井野原駅などの名所を経て、備後落合駅までを結ぶ運行距離60.8キロは当時、トロッコ列車としては日本一でした。

トロッコ列車を走らせることで木次線を観光に活かそうという構想は、1993年に旧横田町やJR西日本木次鉄道部が中心となって提案した「木次線ロマン鉄道」構想に始まります。

地元の熱意で実現したトロッコ列車は、気動車両・控車両・トロッコ車両の3両編成で、定員は64名。愛称の「奥出雲おろち号」は、中国山地の山間を縫うようにして走る木次線を出雲神話のヤマタノオロチに見立てて命名されました。

外装は奥出雲町出身で島根デザイン専門学校講師(当時)の加本千佳さんによるデザインで、白・青・灰色を基調とし、銀河をイメージして星が散りばめられました。奥出雲の夜空を見てひらめいたのだそうです。加本さんは運行初日に一日駅長も務めています。

以後、現在まで変わらぬ編成とデザインで、毎年春から秋にかけて土日祝日を中心に奥出雲を駆け抜けています。

奥出雲の景観の一部に

奥出雲おろち号の運行が始まると、各駅構内での物販が始まるとともに、JR西日本木次鉄道部のみなさんによる出雲横田駅へのしめ縄の設置や、旧横田町内の観光施設を周遊するボンネットバスの運行、さらには、住民のみなさんがボランティアで沿線の清掃作業をされるなど、トロッコ列車の運行を契機とした地域づくりが進んでいきました。

停車駅も増えました。運行を開始した4月時点の停車駅は、現奥出雲町内では、出雲三成駅、出雲横田駅、八川駅、出雲坂根駅、三井野原駅の5駅でしたが、同年7月のダイヤ改正から出雲八代、亀嵩もあわせて全ての駅に停車するようになりました。また時には、銀河をイメージした外装らしく、貸切臨時列車として夜間運行も行われました。

運行開始翌年の1999年度には、第7回しまね景観賞の優秀賞も受賞しました。当時の評価には「この(車体の)デザインが賞の対象だけれど、それよりこの企画自体が景観賞に値する。すなわち、景観を鑑賞する仕掛けがいい」と記載されています。車両のデザインはもとより、トロッコ列車の車窓から奥出雲の景観を眺めるという、景観の鑑賞方法も含めて構想全体を評価いただきました。

運行開始から10年となる2007年には、出雲大東駅から三井野原駅までの各駅に出雲神話にちなんだ愛称がつけられるとともに、島根デザイン専門学校の生徒によるイラストが設置されました。

トロッコ列車の人気から、松江駅や三次駅、広島駅などへの延長運行も行われました。そして、2010年から現在までは出雲市駅を始発駅として片道延長運行されています。

運行開始以降、町内の幼児園の遠足に使われるなど地元にも愛され、奥出雲おろち号は奥出雲を代表する景観の一つとして、日常の中に溶け込んでいます。

ありがとう 奥出雲おろち号

奥出雲おろち号は、運行開始から26年目となる2023年を最後に終了することが決まっています。

沿線では、運行ラストイヤーを盛り上げるため、様々な取り組みが計画されています。

おろち号の鑑賞スポットとなっている道の駅奥出雲おろちループでは、列車の通過時間にスタッフが手を振るなど、おもてなしを続けてきました。今年はさらに、おろち号の思い出を展示するコーナーを設置し、資料や八川の子ども達が描いた、おろち号の絵を展示しています。また、おろち号にちなんだオリジナルグッズや新メニューを準備します。

道の駅の藤原紘子駅長は、展示コーナーやグッズの販売を通じて「おろち号の一番の見所、スイッチバックとおろちループをアピールしたい。トロッコ列車が人気で乗ることができなくても、おろちループからトロッコ列車を見ることで、木次線を旅の思い出にしてもらいたい。」と取り組みの意図を話します。

また、布勢地区では、布勢公民館を中心に5年前から地元住民でトロッコ列車をお出迎えしています。布勢公民館が主催する「ふせっ子チャレンジスクール」では、小学生たちが横断幕や手旗、「トロッコかぶりもの」を作って、おろち号をお出迎え。乗客のみなさんに喜ばれています。今年は更にかぶりものの数を増やしてお出迎します。布勢公民館の山田館長は「トロッコ列車のお客さんに、奥出雲町の楽しさや豊かさを感じてもらいたいし、地元の子ども達もお客さんに喜んでもらうことを通じて、地域を楽しんでほしい。」と語ります。

同様に、布勢で活動する「布勢の魅力活性化プロジェクト」では、出雲八代駅に下りのおろち号が到着する時間にあわせて「ふせカフェ」を開設。カフェに集まったみなさんで毎回、おろち号のお客さんに手をふるなどの活動を続けていますが、この4月からは、木次線と自転車を組み合わせ、のんびり散歩をするようにサイクリングする「ポタリング」を本格稼働します。

「ふせカフェ」を主催する、内田圭子さんと石原菜美さんは、地域外の人との交流を通じて「暮らしている私たちの今を、そのまま良いねと言ってもらったことで、自分たちが地域をより大切に思えた。外からの良い評価を地域に伝えることで、地元の人が地域をさらに誇れるよう、橋渡ししたい。」と話します。

道の駅おろちループから手を振る観光客とスタッフ

トロッコかぶりものでお出迎え

おろち号到着時間に開かれる「ふせカフェ」

RAIL is BATON

おろち号終了後の木次線を盛り上げる取り組みも動いています。

2024年からは、奥出雲おろち号に代わって、山陰線を走る観光列車「あめつち」が出雲横田駅まで乗り入れます。沿線自治体等で組織する木次線利活用推進協議会では、あめつちのお客さんをおもてなしする方策を検討中です。

また、既存車両にラッピングを施した普通列車も運行を開始しました。ラッピングデザインは、昨年3月から5月にかけて公募されたアイデアのうち、特に多かった「桜」「たたら」「神話・斐伊川」「自然・棚田」の4つのテーマを色で表現しています。

ラッピング列車に記載されたキャッチコピー「RAIL is BATON 次へつなごう、木次線」には、鉄道は移動手段という役割以外にも、人や時代をつなぐ役割も担っているという意味が込められています。

おろち号も、このキャッチコピーのように、人や時代をつなぎ、そして、地域の熱意をつないできました。走っている姿を見かけたら、ぜひ手を振っていただければ幸いです。

奥出雲町民だけでなく、長年にわたって、全国の皆様に愛されてきました奥出雲おろち号の運行も、今年で最後となります。特に町民の皆様は、運行が始まる準備段階から関わられてこられた方も多く、感慨深いものがあると思います。

奥出雲おろち号が四季折々の町内を走り抜ける姿は、奥出雲の代表的な景観となりました。私も今回ご紹介しました皆様と同じように、坂根駅で停車の際は幾度となくお迎えお見送りをさせて頂きました。町民の一人一人の皆様も、沿線で多くの方が手を振って頂いていると思います。声をかけ、手を振ることで利用者の皆さんに喜んで頂けることが嬉しく、利用者にも、沿線の皆さんにもこれだけ愛された列車は全国にも少ないのではないでしょうか。

鉄道は単なる移動手段としてだけで評価されるべきもので無く、観光や地域振興であったり、鉄道ファンの増加であったり、人々や地域をつなぐ様々な効果があることを、奥出雲おろち号は長い年月をかけて私たちに教えてくれたように思います。

いよいよ、最終年度の運行が始まります。奥出雲おろち号への感謝と、木次線の未来のため、町民の皆さまには、イベント参加や沿線での見送りなど、ぜひ最後まで運行を盛り上げて頂ければ幸いです。

奥出雲町長　糸原　保